
酔 迷 宮

pinkmint

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

酔迷宮

【Nコード】

N1708BA

【作者名】

pinkmint

【あらすじ】

自分の起こした暴力事件から、芸能人としての危機に立たされた青年。

彼が科されたペナルティは、いちど堕ちたら抜けられない

「秘密の花園」の接待を受けることだった。

巨悪の影を感じながら、主人公は迷宮の住人、異国の少女の手をとり未知の世界へ足を踏み入れる。

前作「墨といちじく」の続編です。そちらを知らなくてもこれ自

体で独立して読めるようにはしてありますので、まずは一話目だけでも覗いてみてください。刺激的な表現が多いですが、基本はプラトニッククラブ……
の、つもりです。

序章 ハニー・ガーデン(前書き)

(小説中に引用している讚美歌は一応著作権フリーを確認してあります)

> i 3 8 4 5 9 | 1 0 9 4 <

序章 八二一・ガーデン

夕暮れ時、そのベッドに座ると、いつもきまって窓から聞こえてくる掛け声があった。

マッチョコーウ。マッチョコーウ。

甲高い複数の女性の声。楽しげで、音楽のようで、いつも同じ調子で。

ぼーんばーんというテニスボールの音が、あたりの建物に反響する。窓際のサンキヤッチャーが、レースのカーテン越しに斜めに入る西日を受けて、虹のかけらのようなプリズムをまっしるな室内にばらまく。部屋のふた隅の花台におかれた白い陶器の花瓶には薔薇の花がこぼれんばかりに活けてあり、その花色が斜めの日差しを受けて白い壁にうすむらさきに映る。

部屋の隅に置かれたテレビの平坦な画面の中では、近く行われるライブの宣伝をする、人気歌手のインタビューが映し出されている。SYOUさん、これが最後のライブということでファンの方々も残念に思っているのではないですか？突然の発表ですが、これから俳優業に専念という……。

いえ、その先のことは今は考え中です。新たなスタートととらえていただければ。

百平米ほどの専有面積を全面改装したそのマンションは、応接スペースとかんたんなキッチンのほかはベッドルーム大小二つに小さな洋室、広いバスルームで構成されており、ベッドルームの一部始終はその洋室からモニターでチェックできるようになっていた。

部屋のドアが開く音がする。ベッドに腰掛けて一心にテレビに見入ったまま、少女は振り向かない。入ってきたのは細身を黒のニッ

トで包んだ、頬に傷のある、顎の尖った男だ。

少女の背後から、男の細い手が伸びて、いつもの目隠しで無造作に目を覆う。柔らかな布の肌触りとともに、視界が闇に閉ざされる。いましがたまで見ていた画面の向こうの青年の美しい面影が、目の内側に残る。

「いいですね。若いお嬢さんたちは、楽しそうで」男がぼつりとつぶやく。

マンションの向かいは良家の子女が集う有名な女子大で、テニスコートの横はチャペルになっていた。

「なんていつてるんだろう、あれ」

「もいつちよいこーう」

少女は小声で歌うように答えた。

「なるほど。いつも聞いているからわかるんですね。羨ましいですか？」

少女は下を向いて首を左右に振った。

呼び鈴が鳴る。

「さて、おいでだ」

男がテレビのスイッチを消す。

いつも無感動な男の声は、群青のびろろつどのような感触を耳に残す。その耳にゴム製の耳栓がきつく刺し込まれる。これで視覚と聴覚を奪われることになる。残るのは、触覚と、嗅覚。

よりどころのなくなった体が少ない情報にしがみつく。ふたつの感覚が急に鋭敏になってゆくの自分でもわかる。

……あ。

柑橘系の、それでいてどこかスパイシーな、シプレの香りがする。お香をも思わせる、和的で落ち着いた香り。のびやかで、たおやかで、それでいて芯のある、大人の女の香り。

ふわりとふわりと周りの空気が動く。服を脱いでいるのだろうか。少女は薄い絹の、薄桃色の夜着を一枚、素肌にまとっているだけだった。

指の感触が首に触れ、なにかベルベットの首輪のようなものが首に巻かれた。

ふいに、耳栓が外される。

「こんなものがあつたらお話しできないわ」

やはり、女のひとだ。遠くのほうから、いいんですかと男の声を
する。

「いいのよ、そこらへんはこちらの自由でしょ。わたしこの常連さんと違ってそんなに有名人でもないしね。もういいからあつちに行つてちょうだい」

声のほうに首をめぐらすと、首輪についた鈴がちりんと鳴った。

「かわいいわ」

指が、ベッドに座つたままの少女の夜着の前開きのボタンをすいすいと外してゆく。すると絹が体を下りて行き、素肌に空気が当たる。テニスボールの音は止み、聖歌が聞こえてきた。

「いい環境ね」

足首にも同じものが巻かれる感触がある。

「立って」

立ち上がると、ごく自然に服はすくと足元に落ちた。手を添えて、絹のかたまりから女が少女の足を抜く。足首からもしゃらんと軽い音がする。

下着をつけていないので、身にまとっているのは鈴つきの首輪と足輪だけだ。

ああ、自由になった。

少女はいつも思う。身にまとっているものには、それがどんなものであれいつも抵抗があるのだ。なにかも脱ぎ捨てて、ああ、これで自分はささやかに自分だけになったと思う。

「なんてきれいな。しなやかで、猫みたいな体ね」うつとりと、シプレの香りの主が言った。

「いつも男たちにいようにされているんでしょう。今日はあなたのしたいようにしてあげるわ。してほしいことを言っちょうだい」

「してほしいこと……」

少女は首をかしげて考えた。そんなことを言われたのは初めてだ。女の手が髪に触れ、高い位置で留めていた髪留めを外した。アツプになっていた髪がほどけて背中にふさりと落ちた。

「背中を撫でてください」

「……背中を？」

表皮の冷たい、ふくよかな腕が少女の体に回された。薄いサテンのような柔らかい布の、胸元のフリルが少女の乳首をくすぐった。ふるりと、体の芯が震えた。

女の手が少女の背中を滑る。なめらかな背骨のラインに沿って掌がゆっくりと上下する。五本の指が広がって、何かの楽器を奏でるようにやさしくそれぞれの線を辿る。その感触の優しさに、少女の奥にある何かの琴線が切ない音で鳴った。

「いい子ねって言うてください」

女は含み笑いをすると、少女の耳元に口を寄せた。

「いい子ね」

「……たくさん」

「いい子。ほんとうに、お前はいい子」

しつとりと、瞑想を誘うような深い香りが少女を包む。

少女はそっと女の背に手を回して胸に顔をうずめた。

「いい子よ」

女は少女の頬に唇でふれた。少女は顔を動かし、その唇に自分の唇を寄せた。かるくふたつの吐息が絡まり、そしてすっと離れた。

「もう、どうしようかしら、この子」

女は感に堪えないという風につぶやくと、そのまま少女の体を柔らかなベッドの上にゆっくりと倒した。

絹糸のような髪をもみくしゃにしながら、今度は小さな花の蜜を吸い尽くそうとするように、薄紅色の唇に自分の唇を重く重ね、舌で口内を弄る。少女の口内は春の青草のように香り、きれいにそろった歯が開いて優しく女の舌を受け止めた。

「そんなにかわいらしい注文をするような子が、こんなお仕事をし
てるなんて、胸が痛いじゃないの。あなたを幸せにしてあげたくて、
この身がはちきれそうだわ」

そつと唇を離して呟く女の息からは薄荷煙草の匂いがした。ちり
んちりん、しゃらんしゃらんとかすかな鈴の音が室内に響く。

音は視覚の記憶を刺激する。突き上げる錫杖の先の遊環、猛々し
く首を振りながら舞う獅子の首の鈴の音、火花を散らす爆竹と銅鑼
の音、闇を切り裂いて青くうねる夜光龍の残像、窓辺に下がる赤い
唐辛子の飾り物。

少女はどんな目に遭わされるのも、別に嫌いでもいやでもなかつ
た。

外に出ている部分でも体内の部分でも、女としての器官を、何の
感情も載せずに刺激され、蹂躪され、あるいは貫かれることが、い
やではなかった。

どこにおいてあるのかわからない心と体が瞬時につながる、奇跡
のような瞬間。どこにも届いていないのに、何かに届いた気がする、
自分の生に手を伸ばしてつかめた気がする、あの目もくらむような
快感。まずしい精神をおきざりにして自分は肉となる、そしてすべ
てから許されて自由になる。たとえ錯覚であつても、その瞬間が嫌
いではない。

でも。

背中を滑る手が触れるのは、もつと奥。記憶とか感傷とか、寂し
さとかせつなさとか、そういうもの。ひとすべりするたびに、何か
の痛みのスイッチが入る。ひとの指にはいつも、魔法が宿る。肉の
奥の鼓動とシンクロした瞬間、それは秘密の箱を開ける鍵となる。
いい子、いい子、お前はいい子。そうくりかえしいわれたのはい
つのことだつたらう。あれは誰だつたんだらう。

無限に許されて自由だった、誰かのことがただ大好きだった。そ
の記憶が、毎日思わない日はないテレビの向こうの愛しい人への焼
けるような思いとないまぜになり、内側から身を焦がす。会いたい、

あのひとに会いたい。

少女の背を滑っていた手が、前に回り下に降り、ささやかなへその窪みを通して、その下の茂みに埋められた。

少女はちいさな声を上げて、弾けるように背をのけぞらせた。

「やさしいひとはこれでおしまい」

左右に振るその首の鈴のがちりんちりと鳴った。

讚美歌は、まだ続いている。

「今日は爪を切ってきたのよ、あなたのために。

あなたを知ると後戻りができなくなるといううわさを聞いてきたの。素敵じゃない。楽しみだわ」

……ありがとう。わたしは許される。

もつと来て。わたしは肉になる。

そしてわたしの鍵を開けたら、今度はあなたを帰さない。

ようこそマダム、ハニー・ガーデンへ。

……まぼろしの影を追いて うき世にさまよい

うつろう花にさそわれゆく 汝が身のはかなさ

春は軒の雨 秋は庭の露

母はなみだ乾くまなく 祈ると知らずや

おさなくて罪を知らず むねにまくらして

むずかりては手にゆられし むかしわすれしか

春は軒の雨 秋は庭の露

母はなみだ乾くまなく 祈ると知らずや

ボンベイ・サファイア・ブルー

コリアンダー、アーモンド、リコリス、オレンジピール。

薫り高い草根木皮から抽出された香りが、花に近い芳香となって体内から鼻腔へ抜け、胃に小さな陽を灯す。

陽は無数の小さなともしびを全身にゆるゆると運び、まだやれる大丈夫まだいける、行こう、前へ行こうとやさしく語りかけてくれるのだ。

この薄青い綺麗な液体を敵視する理由がどこにあるだろう。

SYOUはボンベイ・サファイアの栓をきゅっと締め、紙袋に入れると個室のドアを開けた。

トイレから出ると、二千人収容のホールの方向からマイクのハウリング音が響いてきた。不機嫌な鉄の箱はわんわんと音を反響させ、テストテストというスタッフの音が、きょうが何の日か、だるい頭に念を押してくる。

この音を聞くのも今日が最後。

ばしばし頬を叩いてから控室の扉を開けると、マネジャーの哲夫がノートパソコンから顔を上げた。

「長いトイレだったな」

「とっついて」

ぐしゃりと口を握りつぶした紙袋をSYOUがぞんざいに渡すと、中を覗いた哲夫が呆れた声を出した。

「おい、……くら」

「四十七度」

唇に薄い笑いを浮かべながらそういつてビニールのソファに腰を下ろし、SYOUは長い足を投げ出した。

「ちょっと景気づけにひっかけてきた。手元にあると誘惑に負けちゃう。さすがにちびちびやるにはきつい度数だし、預けることにす

る」

「捨てるぞ」

「どうぞ」

SYOUは天井を見上げた。

「それは俺の首輪につける縄みたいなものだから。ほどいたら最後、金輪際どの収容所にもひきずっていけやしない。」

大丈夫、ライブが終わればジンに頼るのもやめるよ」

「順番が逆だろう、ライブの間こそやめるべきじゃないのか。収容所って、ステージのことじゃないだろうな」

「違う。そのあとのお勤めの話」

「……あれか」

小声で言うと、哲夫は紙袋を自分の鞆にしまった。

「まあ、その話はやめよう。社長だって本当はあんな糞接待は止めたかったんだ、最後まで回避の方向を探してた。それはもう必死にだが、もうどうしようもなかった」

「わかってる、全部俺が撒いた種だ。……全部、俺が悪い」

哲夫は、仰向けになって天井を見ているSYOUに向かって言った。

「俺は正直残念だよ、音楽活動停止っていうのはな。これだけはつづけさせてやりたかった。歌ってるお前を見るのが好きだった」

目を閉じたまま、SYOUは口を開いた。

「いつかこんな時が来るとは思ってたんだ。どんなことにも、始まりがあつて、終わりがある。一日も二十四時間ワンサイクルでいちいち終わりが来るから、人間は次の日も生きられる。来世がほしいとは思わないけどね。」

正直、勢いだけでここまで来られるとは思わなかった、自分としてはもう限度だ。幕を降ろすにはいい機会だよ」

哲夫はレモン入りのミネラルウォーターの入ったシャトルの蓋を開けてSYOUに手渡した。

「……お前と初めて会った時、あれはもう四年前か、歳のわりには

結構大人びてると思ったよ。でも今思えば、あの時のままいくつになっても成長してないともいえる。お前は年の取り方がいびつだな」
SYOUは喉を鳴らしてレモン水を飲み干した。

「ああ、……美味しい」

「少しはアルコールは抜けたか」

口元を拭くと、SYOUは哲夫に人懐こい笑顔を向けた。

「今回のことでは事務所のみんなに迷惑かけつぱなしかったからね。来た観客全員にこれが最後と信じたくないと思わせるようなライブにするよ。特に、一番世話になった北原哲夫氏のために」

「……そりゃあ光栄だな」

「さて、と」

シャトルを哲夫に投げ返すと、首と肩をぐるぐる回し、ばんと音を立ててSYOUは控室のドアから出て行った。廊下から、バンドの連中と朗らかに挨拶している声が聞こえてくる。

哲夫はしばらく時計をながめたあと、ステージ脇に回り、袖から舞台上のSYOUを見つめた。

サファイア・ブルーの光に彩られて浮き上がる横顔は、名工の手で彫り上げた彫刻のようで、何度見てもそのたびに感嘆せずにはいられない。

……お前はときどきさつきみたいに、胸がうずくような笑顔を見せる。それがどれだけ破壊力を持つか、今まで一度も自覚したことがないような顔をして。

「……そのところはサス残していきたいんだ。ソロのドラムの敦に光残して。で、三曲目との間はクロス・フェードだろ、光も途絶えないように。シーリングスポットはそこ青めでよろしく。で、スクリーン換える間に紗幕降ろす、そのタイミングが昨日は遅かったよね。ちょっとそこまで通してやってみて。あとポップノイズがひどいのが気になった、ちょっとタカさん、その位置でタッチット言ってくれない。マイクとの距離の見当つきたい。で、位置決めた

らバミっという（*）」

こうして見ると、素直で健康なただの青年だ。

……こいつが見てくれの通りであつたら、あんなことは起きなかつたのに。

それにしても、ひとつのキャリアを失おうとしているというのに、妙に清々しく、そして漂う気配も暗くない。こいつはもうほかの何か照準を定めたのか。それとも何も考えていないのか……

哲夫の耳に、三週間前SYOUからかかってきた電話の、切羽詰まった声色が蘇る。

あの失態の落とし前としてライブを今回限りで打ち切ると決められたとき、読めない無表情の中に、何かほっとしたものがあつた。

嵐のようだったあの一夜、彼は何を失い、何を見つけたのか。とにかく、このステージが、彼がどうしても失いたくないものでなかつたらしいのは確かだ。

最初からそうだった、社長が彼を連れてきたときから、ギターを抱えてはいたものの、どこへ向かつたらいいのかわからないという顔付きをしていた。

有名になりたいかと聞かれ、金が欲しいと素直に答えた。

社長は笑って、必ず稼がせてやると言った。

そしていま、その通りにはなつた。……だが。

彼が手にした招待状が、どれだけやつかないな世界への入り口か、たぶん自分よりも社長がよく知っている。ちくしょう、ちくしょうと呟きながら、社長が頭を抱えているのを初めて見た……

……哲夫は胸の中で、端正な横顔に呼びかけた。

SYOU。

今日で歌手としてのお前は終わる。だが、そのほかの分野でむしろ人気の出過ぎたお前には大した痛手ではないだろう。

しかし、お前が明日向かわねばならない場所がどれだけやばいところか、詳細をきかされていない自分にも気配で伝わってくる。

今日は歌え。そしてそののち、どこへいこうと、……とにかく帰ってこい。

俺は見たい。この世界を泳いで、お前が最終的にどこの高みへ向かうのか。

ボンベイ・サファイア・ブルー（後書き）

*バミル …… ステージ上の位置をテープなどでマークしておく

蓋

話は三週間前にさかのぼる。

その夜、三月にしては寒すぎる雨が梅の花を散らし始めていた。

歌手活動の最後を飾るライブを三週間後に控えて、S Y O Uは赤坂のスタジオでのセッションを終え、どこかでビールと動物性脂肪質でも補給しようかとツアーバンド仲間と話し合っていた。

「下に、……また、来てるみたいだけど」

自販機に飲み物を買って行ったギターのダイが、戻ってくるなり口ごもりながらS Y O Uに耳打ちした。一瞬息を止め、S Y O Uはため息交じりにつぶやいた。

「……参ったな」

手早く帰り支度を整えてエレベーターで一階に降りる。ホールの隅の自動販売機の横で、バーバリーロンドンの膝丈のトレンチコートに黒い革のブーツの女が、壁に背をもたせかけて携帯を覗いていた。

立っているだけで目立つのは際立ったスタイルのせいだ。ダークブラウンのロングヘアが緩やかなウェーブに小雨のきらめきを乗せて半分顔を隠している。

「詩織」

小声の呼びかけに顔を上げると、女は少し笑った。

「今日はきみも仕事だったってなかったっけ」

「もう済んだわ、簡単な撮影だもの」

「で、何の用」

「私物を取りに行きたいのよ。あなたの部屋にわたしのもの、まだいろいろあるし」

「じゃあ送るよ。どこに送ればいい。実家？」

詩織は少しため息をつくようにすると、黒目がちの目でS Y O Uを見上げた。

「……冷たいのね。今ホテル住まいだし送られても困るわ。自分で選びたいの。いらぬものはあなたが捨てるか使うかして。それも新しい女でもいて来られると困るの？」

「今いないよ、そんな暇もないし」

「わたしも、ただ私物を引き取ってけじめをつけたいだけ。さくつと、いいよつていいなさい。いいじゃない、それぐらい」

なし崩しにいつの間にかタクシーの後部座席に並んでいた。

伊藤詩織。有り余る程の金を持ち、お嬢様大学の大学院に通いながら、モデル兼女優として最近名が売れ始めた、……一週間前に別れた女。

彼女のどこがよくて、飽きつぱい自分が一年も続いたのかよくはわからない。

だが、こうして並んで車に乗っていると、そしてその横顔を見ていると、言いようのない後ろめたさが胸に押し寄せて来る。

人生の転換期に立っていた十四の頃、何度も自分を車に乗せては説教をしてくれた恩人の女性がいる。その面影に、ほんの少し、彼女は似ているのだ。

もちろん、偶然。そう、付き合ってから気づいたことだから、偶然。

お前が付き合ってるあの女のことだけど、と、私生活にはあまり口出ししない関岡社長が珍しく言い出したのは二月末のことだった。

……あの女が誰だかわかっているのか。構成員が一万人を越える広域暴力団、権田組の組長の娘だぞ。

妾腹の隠し子とはいえ、その母親が早くに病死して不憫だからと金ばかりを与えた結果、手が付けられなくなってるお嬢だ。暴力団規制法が施行されてから取り締まりが強化されてきた現在でも、なお権勢を誇っている唯一の組だ。

いいかげん、現実を見て距離を取れ。あの娘はいろいろとヤバす

ぎる。

そのころ、二人はよくけんかをしてきた。たびたびできる顔のひつかき傷を見かねた社長が、今まで大目に見ていたSYOUUの交際に口を出したのだ。朝顔の花が萎むように、そのころ、詩織の肌や気紛れな性分に対する興味も執着も枯れかけていた。

……もう終わりにします、ちょうど愛想を尽かされかけてますから。そう答えると、社長は心からほっとたような顔をして、そうかと笑った。

忠告を受けた翌日、SYOUUは部屋で早速別れ話を切り出した。詩織は覚悟していたように、冷めた目で聞いていた。

……結局わたしのことなんか好きじゃなかったのよね、はじめから。誰のことも好きになんかなれないくせに。

その通りだ、ごめん、俺には恋愛の資格がないらしい。だからちやんと優しくしてくれるいい男を探してくれ。

率直にそう答えたら、いきなり灰皿が飛んできた。それから平手打ち。SYOUUの載っている雑誌を本棚から引き抜いては泣きながら床に叩きつける彼女を見ていて、心の中で、ああまたこれか、とため息をついていた。

初めて一緒に食事したとき、飲んだのがたまたまとびきり美味しい酒で、酔いに任せて近くのビルの屋上上がり、この世から爆弾で吹っ飛ばしたいものを叫びあった。非常階段で知っている限りの歌を歌った。公園の池沿いの道を歩いていた亀を拾い、ケロリンの洗面器で飼った。刃のように容赦のない彼女の物言いと、時折見せる子どものような笑顔が好きだった。

宝物を探すように、都会の片隅の、自由の片鱗を二人で拾い集めた。楽しかった。

彼女を見ていたかったし、幸せにしたいと思った。それが自分の都合でも、どこに根差すものでも、その瞬間の気持ちに嘘はなかった。それでもいつの間にか二人の間に風が吹き始め、女が寂しい寂

しいと訴える回数が増え、それが重荷になって関係は終わる。どうしていつもうまくいかないのだろう、自分も寂しいのは同じなのに。

「なんだかなつかしい、この匂い」

SYOUのマンションの部屋に入ると、詩織はモノトーンを基調とした無機質な室内を見廻しながら言った。

「わたしがバリで買ったフランジパニの石鹸と、あなたのキャスタが混じりあった香り。ついこの間まで住んでいたのに、もう遠い昔のことみたい」

「……」

「服にね、この部屋の香りが染みついているの。バッグにもよ。だんだん薄まっていくのが切なくてね。マフラーなんて、洗えもしないや捲けもしない。バカみたい」

黙って突っ立っているSYOUを振り向いて、詩織は言った。

「警戒しないで、また住み着こうなんて思ってないから。でもひとつだけ聞かせて。わたしのこと、ほんとに、好きじゃなかった？」

「……いいや」

「最初は好きだった？ 少しは思ってくれた？」

それとも、わたしの親が普通の親だったら、こんなことにはならなかった？」

詩織が少しずつ買ってきてきては大事に水をやってきた鉢植えの花々が夜の窓辺に並んでいる。それを眺めながら、SYOUは答えた。

「親がだれかなんて、俺には関係ない。」

昔から、好きって感情がよくわからないんだ。誰かに好きだと言うと、そのあと、その言葉に交じってるかもしれない嘘が気になって、申し訳ない気持ちになる。心の中が不純物だらけで、自分の本音がよく見えない。自分にそれを言う資格があるのかとか、面倒なことを考えちまう。

でも、一緒にいたいと思ったし、きみを見てると、……幸せだった」

詩織は目を細めると、ふうつと細いため息をついた。

「それを聞いたかったの。ありがとう。」

楽しかったよね、ちよつとの間だけど。……わたしも、幸せだった」

うつすらと涙の浮かんだ詩織の瞳は、愚かなことにこれまでで一番きれいに見えた。

「ねえ」

「うん？」

「最後にキスして」

「……駄目だよ」

「そこで止める自信がないから？」

詩織は微笑みを含んだ目で見つめながら、SYOUの腰に手を回した。

「あなたの帰りをここで待ち続けて、死にたくなった夜がいくつもあったのよ。」

退屈しのぎにネットを開いたら、SYOUと女優Eがホテルのバーなうとかツイッターに爆撃されて、部屋に火をつけたくなったことも。

それを全部がまんして、おまけに忘れてあげるっていうんだから、ひとつくらい置き土産をくれてもいいと思う」

SYOUの頬を両手ではさみ、詩織はきゅっと目を閉じて唇を突き出した。付き合い程度に唇で触れると、いきなり力を込めてSYOUの頭を抱え、まるで息の根を止めようとするかのように強引に唇をむさぼる。思わず目を閉じて、無意識に上がった両手を、いつもの動きをなぞるように詩織の背中に回していた。

「……好きだったのに。本当に、好きだったのに。あなたはどうでも、わたしは本当に、本当に……」

「……ごめん」

恋というものが持続を求められるものではなく、ただ今、その刹那の深さだけではかれるものならば、自分は何度もきちんと、心か

ら人を愛したのに。そのつもりだったのに。永遠だと思ったものはいつもあつという間に形を変えてゆき、その変化を誤魔化すことが自分にはできない。こうして、涙に濡れた頬を胸に押し付けられても、時間は戻せない。

それでも、自分の内部に行けばいくほど温度の下がる冷えた精神構造の中心に、その夜はめつたに灯らない灯りが灯っていたとSYOUは思う。彼女の悲しみと自分の空洞を共に満たすという未知の衝動に導かれて、今までにないぐらい腕に力を込めて彼女を抱きしめていた。

嬉しい、とかすれた女の声が耳に切なく響いた。

優しくして、お願い。最後だけ、もっともっと優しくして……

翌朝、皺の海に埋もれそうになりながらシーツの中で目を覚ますと、身支度を整えた詩織が鞆に荷物を詰め込んでいるところだった。SYOUの視線に気づくと、どこかばつが悪そうに微笑みながら声をかけた。

「おこしちゃった？ まだ寝てていいのに」

「……………」

一瞬置いて夕べから今までのことを一気に思い起こし、SYOUはただ、ああ、うん、……と間抜けな声を出した。

「寝顔が綺麗で見とれてたの。口をきくと、また未練が生まれそうだから、黙っていいこうと思ってた」

「私物とか、整理は済んだの？」 SYOUは寝起きのかすれ声で尋ねた。

「ああ、結局服だけ持っていくことにしたわ。あとのものは適当に処分していいね。あ、それから」

詩織は左手でSYOUを指さすと、右手の人差し指で自分の耳をとんとんしてみせた。

「お別れにもらっというたわ」

「何を？」

「慰謝料替わり。本当は別れたくなかったのよ、わかるでしょ。でも未練は残さないでおいてあげる。いただいたものは、恋愛不感症のあなたへの罰」

SYOUははっと自分の耳に手をやった。

……ピアス！

「おい！」

思わず大声が出ていた。

「おお、怖い。お隣の人が起きちゃうわよ」

「……ふざけるな。返せよ！」

久しく出したことのない低い声だった。語尾が震えているのが自分でもわかる。

「たかがダイヤのピアスでしょ。一年分の慰謝料と思えば安いものじゃない」

「そういう問題じゃない」

「じゃあどういう問題なの」

「あれはただのピアスじゃないんだ。金に代えられない唯一無二の思い出の品なんだ。マジで冗談じゃすまない。とにかく返してくれ」

「よっぽど大事な女からもらったのね。じゃあ名前言ってくれたら返すわ」

「交換条件どころじゃない、ほんとに返せ。返してくれ、頼むから。女なんかじゃないんだ、あれは俺の……」

「あなたの、なに？」

「……蓋なんだよ」

「なによ、それ。蓋がなくなると何が出て来るの、その中から」

「詩織！」

SYOUの怒鳴り声に、詩織はつんと顎を上げた。

「そんな大声で脅したって返してあげない。何よ、昨日は天上の恋人みたいに扱ってくれたのに、たかがピアスで気がふれたような顔しちやっつて。そうね、また会ってくれたら、その時は考えてあげる

わ。でも、それ以上脅しつけるなら捨てちゃうからね。いつでも電話しようだい。じゃ、さよなら」

SYOUはベッドサイドのガウンを乱暴に羽織ると、背を向けた詩織の手を乱暴に掴み、そのまま後ろに引き倒した。詩織は仰向けにベッドに倒れて、悲鳴を上げた。その耳に、ピアスはなかった。

「ピアスはどこだ！」

狂気のような表情のSYOUに長い髪をわしづかみにされたまま、詩織はもがいた。

「痛い痛い、手を離して！人を呼ぶわよ！」

「言わないでこの部屋から出られると思ってるのか。ふざけるな。言え！」

男の豹変に、詩織の目も座り、冷たい光と涙をみなぎらせて怒鳴り返した。

「SYOUのバカ！ 大っ嫌い。何よ、結局わたしなんてあなたにとってはピアス以下のゴミ屑なんじゃない。いつも思ってた、あなたの目はきれいだけど底なしに冷たい、生粋の人でなしの目だわ。わたしがよく知ってるヤクザの目よ。」

知らんぷりして言わないであげたのに、あなたの秘密。わたし知ってるのよ、名前を変えて隠してるあなたの過去。言ってあげましようか。

SYOU、本名、柚木晶太。

たった十四で、母親と共謀して実の父親を殺した……」

「黙れ！」

ふわりと全身が熱に包まれ、すべてが現実感を失った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1708ba/>

酔 迷 宮

2012年1月6日15時50分発行